

郡 川 遺 跡

第8次調査

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

郡川遺跡は八尾市の東部、生駒山地のなかでも高安山の麓に広がる扇状地にあたります。八尾市の東部の扇状地は古来より人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの埋蔵文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

同遺跡は過去の発掘調査では、縄文時代～近世に至るまでの生活跡を発見しています。

この度、平成20年度に実施いたしました保育所建設に伴う発掘調査の報告書を刊行する運びとなりました。調査では周辺の調査地と同様、弥生時代後期、平安～鎌倉時代の遺構が検出されました。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年12月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 岩崎 健二

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市黒谷一丁目56番1で実施した保育所建設に伴う郡川遺跡第8次発掘調査(KR2008-8)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が社会福祉法人 厚生博愛会から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会の西村公助が担当した。
1. 現地調査は平成20年9月24日に着手し平成20年10月9日に終了した。調査面積は約122m²である。
1. 現地調査には、岩本順子・梶本潤二・竹田貴子・永井律子・中野一博・中村百合・中浜輝志・西出一樹・村井俊子・吉川一栄の参加を得た。(敬称略、五十音順)
内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年12月26日をもって終了した。
(敬称略、五十音順)
遺物実測—中村 図面トレース—西村 遺物写真撮影—西村
1. 本書の執筆及び編集は西村が行った。
1. 各調査に際しては、写真・実測図を作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1地形図(平成8年7月編纂)を基に作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
1. 本書で用いた方位は国土座標第VI系の座標北を示している。
1. 土色については、『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。

本 文 目 次

| | |
|---------------|---|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第2章 調査概要 | 1 |
| 第1節 調査の方法と経過 | 1 |
| 第2節 層序 | 3 |
| 第3節 検出遺構と出土遺物 | 3 |
| 第3章 まとめ | 7 |

第1章 はじめに

郡川遺跡は、八尾市の東部に存在する縄文時代中期末～室町時代に至る複合遺跡で、地理的には、国道170号線から東側の扇状地一帯に位置する。現在の行政区画では郡川一～五丁目、教興寺一～七丁目、垣内一～五丁目、黒谷一～四丁目遺跡の範囲である。当遺跡周辺には北に水越遺跡、東に高安古墳群、南に恩智遺跡が存在している。

当遺跡内では八尾市教育委員会(以下市教委)や(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)が発掘調査を実施しており、弥生時代から近世の遺構・遺物が検出されている。

当調査地の周辺では、南側約200m地点で、平成2年度に研究会が実施した第2次調査があり、弥生～室町時代の遺構・遺物を検出している(原田1999)。また、北側約300m地点では平成7年度に研究会が実施した第3次調査があり、縄文時代中期末～近世の遺構・遺物を検出している(坪田2006)。さらに、今回の調査と同一敷地内では平成19年度に研究会が実施した第6・7次調査があり、弥生～室町時代の遺構・遺物を検出している(成海2008・西村2008)。

同遺跡内の北部には古墳時代後期の郡川東塚古墳および同西塚古墳が存在する。このうち東塚古墳では近年宅地開発に伴う調査を行い、葺石や埴輪列が良好な状態で残っていることを確認した(藤井2002・樋口2006)。また、墳丘の縦横断面を観察した結果、同古墳の墳丘構築法が復元され(樋口2006)、注目に値する大きな成果が挙げられている。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は保育所建設に伴うもので、研究会が郡川遺跡内で行った第8次調査にあたる。調査は建物基礎部分を対象に約122㎡について行った。

調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約1.6mを機械掘削し、以下0.4m前後の厚みの地層は人力掘削を行い、遺構の検出に努めた。また、面的な調査終了後、部分的に下層の確認を行った。なお今回の調査は、掘削土の置き場所の都合から、調査地を北部(1区)と南部(2区)に分けて行った。

本調査では、研究会第7次調査で使用した地区割りをそのまま用いた。地区割りは、調査地の北東に位置する国土座標第VI系座標点(X=-152825.000m : Y=-33460.000m)を基点とし、本調査地を包括する東西50m、南北150mの範囲に10mメッシュを設定した。北東隅を基点として、東西方向をアルファベット(東からA～E)、南北方向を算用数字(北から1～15)で表し、1A区～15E区とした。

遺構番号は、遺構略号を付した後に3桁の算用数字で表現した。3桁の数字の内、上1桁は遺構検出面を表し、それ以下の桁で遺構の検出番号を示す。

調査の結果、第1面では平安時代後期～鎌倉時代、第2面では古墳時代中期～後期、第3面では弥生時代後期、第4面では弥生時代後期以前の遺構面を検出した。出土遺物はコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)1箱である。



図1 調査地周辺図

周辺の調査一覧表

| 遺跡名 | 調査主体(周辺図掲載略号) | 調査年月 | 文献 | 発行年 |
|------|---------------|-----------------|--------------------------|------|
| 郡川 | 市教委(63-193) | 昭和63年9月 | 八尾市文化財調査報告19 | 1989 |
| 郡川 | 市教委(89-032) | 平成元年8月 | 八尾市文化財調査報告21 | 1990 |
| 郡川 | 市教委(89-399) | 平成2年1月 | 八尾市文化財調査報告21 | 1990 |
| 郡川 | 研究会(KR89-1) | 平成2年2月 | (財)八尾市文化財調査研究会報告57 | 1997 |
| 郡川 | 研究会(KR90-2) | 平成2年5月～8月 | (財)八尾市文化財調査研究会報告64 | 1999 |
| 郡川 | 市教委(90-105) | 平成2年5月 | 八尾市文化財調査報告23 | 1991 |
| 郡川 | 市教委(93-075) | 平成5年7月～8月 | 八尾市文化財調査報告29 | 1994 |
| 郡川 | 市教委(96-275) | 平成8年9月 | 八尾市文化財調査報告36 | 1997 |
| 郡川 | 市教委(98-400) | 平成10年12月 | 八尾市文化財調査報告40 | 1999 |
| 郡川 | 研究会(2002-65) | 平成14年11月 | 八尾市文化財調査報告48 | 2003 |
| 郡川 | 研究会(2002-304) | 平成15年9月 | 八尾市文化財調査報告49 | 2004 |
| 郡川 | 研究会(2003-219) | 平成15年10月 | 八尾市文化財調査報告49 | 2004 |
| 郡川 | 研究会(2003-278) | 平成16年9・10月 | 八尾市文化財調査報告50 | 2005 |
| 郡川 | 研究会(2006-166) | 平成18年9月 | 八尾市文化財調査報告55 | 2007 |
| 郡川 | 研究会(2006-516) | 平成19年4月 | 八尾市文化財調査報告57 | 2008 |
| 郡川 | 研究会(KR2007-6) | 平成19年4月～5月 | 平成19年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 2008 |
| 郡川 | 研究会(KR2007-7) | 平成19年9月～11月 | 平成19年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 | 2008 |
| 郡川 | 研究会(KR2008-8) | 平成20年9月～10月 | 今回の調査 | |
| 郡川東塚 | 市教委(2000-306) | 平成12年11月～13年12月 | 八尾市文化財調査報告46 | 2002 |
| 郡川東塚 | 研究会(T2001KOH) | 平成13年10～12月 | 八尾市立埋蔵文化財調査センター報告7 | 2006 |
| 郡川東塚 | 研究会(2002-153) | 平成14年8月 | 八尾市文化財調査報告48 | 2003 |

第2節 層序

現地表面は18.6m前後で、以下9層の堆積を確認した。

- 0層 盛土
- 1-1層 2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土。近代以後の耕作土。
- 1-2層 2.5Y3/1黒褐色粗～細粒砂混粘土。近世以前の耕作土
- 2層 2.5Y6/1黄灰色細粒シルト質粘土。
- 3層 10YR4/6褐色細粒砂混粘土。上面は攪拌を受け、土壌化している。平安～鎌倉時代の遺構を検出した(上面第1面)。
- 4層 5Y5/1灰色細粒砂混粘土。上面は土壌化している。古墳時代中期～後期に相当する層である(上面第2面)。
- 5層 5PB2/1青黒色細粒～粗粒砂質粘土で、細礫を含む。上面は土壌化している。弥生時代後期の遺構を検出した(上面第3面)。
- 6層 5PB2/1青黒色細粒～粗粒シルト質粘土で、弥生時代後期以前の地層である(上面第4面)。
- 7層 7.5Y6/1灰色細粒～粗粒シルト。洪水砂の堆積である。
- 8層 7.5YR3/1黒褐色中礫混粗粒砂。土石流堆積である。

第3節 検出遺構と出土遺物

第1面

平安～鎌倉時代の溝を8条(S D 101～108)検出した。

S D 101～108

調査地北部で検出した。東西方向に伸びる溝2条(S D 101・102)と、南北に伸びる溝6条(S D 103～108)がある。幅0.2～0.7mを測る。断面形状は台形または逆台形を呈し、深さ0.05～0.15mを測る。埋土はS D 101・102が10YR5/1褐灰色粗粒砂混粘土で、S D 103～108が5B6/1青灰色細粒砂混粘土である。溝内からの遺物の

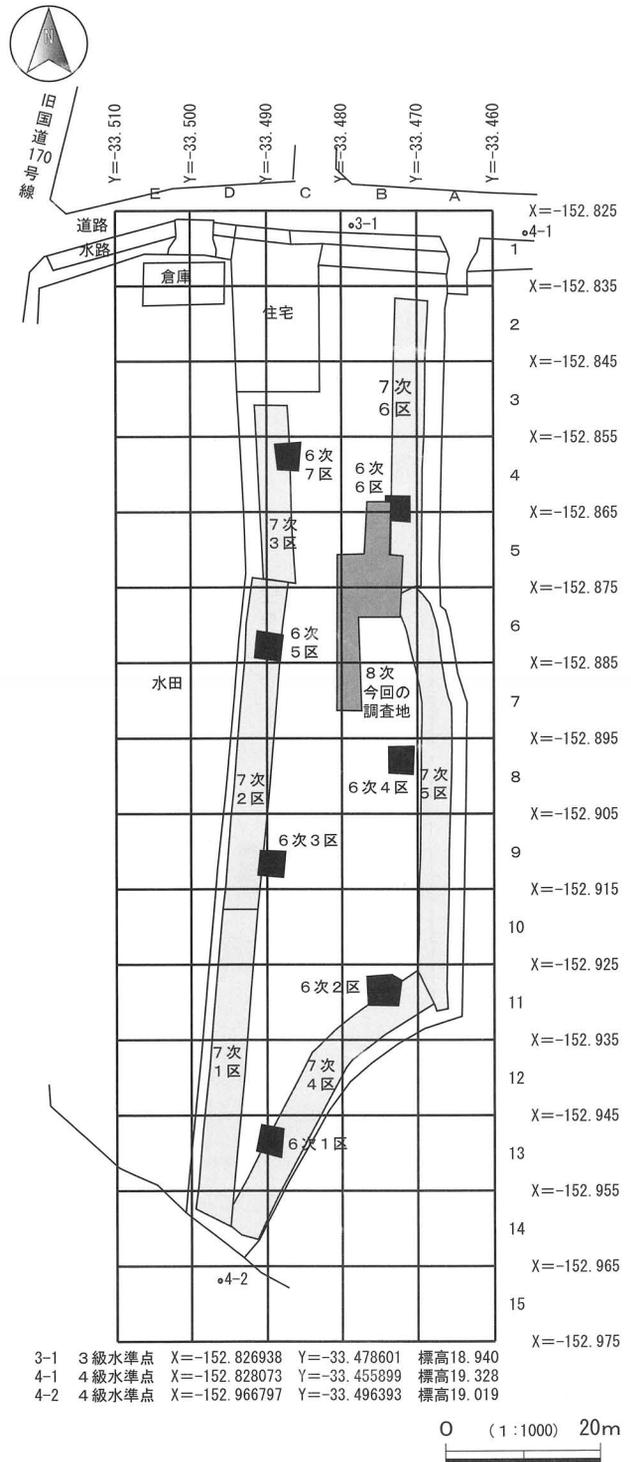
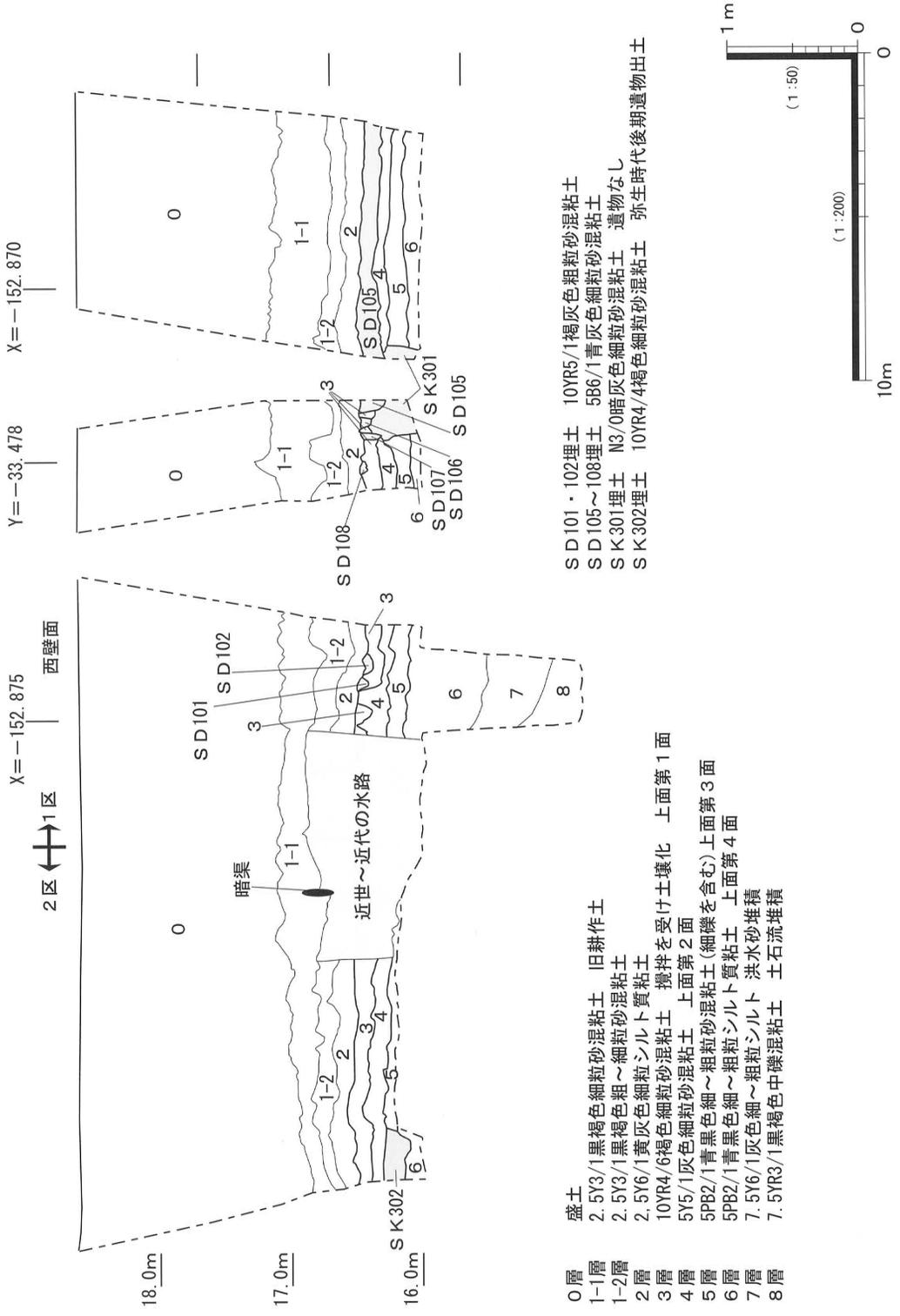


図2 地区割図



- 0層 盛土
 - 1-1層 2. 5Y3/1 黒褐色細粒砂混粘土 旧耕作土
 - 1-2層 2. 5Y3/1 黒褐色粗～細粒砂混粘土
 - 2層 2. 5Y6/1 黄灰色細粒シルト質粘土
 - 3層 10YR4/6 褐色細粒砂混粘土 攪拌を受け土壌化 上面第1面
 - 4層 5Y5/1 灰色細粒砂混粘土 上面第2面
 - 5層 5PB2/1 青黑色細～粗粒砂混粘土(細礫を含む) 上面第3面
 - 6層 5PB2/1 青黑色細～粗粒シルト質粘土 上面第4面
 - 7層 7. 5Y6/1 灰色細～粗粒シルト 洪水砂堆積
 - 8層 7. 5YR3/1 黒褐色中礫混粘土 土石流堆積
- SD101・102埋土 10YR5/1 褐灰色粗粒砂混粘土
 - SD105～108埋土 5B6/1 青灰色細粒砂混粘土
 - SK301埋土 N3/0 暗灰色細粒砂混粘土 遺物なし
 - SK302埋土 10YR4/4 褐色細粒砂混粘土 弥生時代後期遺物出土

図3 断面図

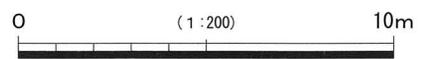
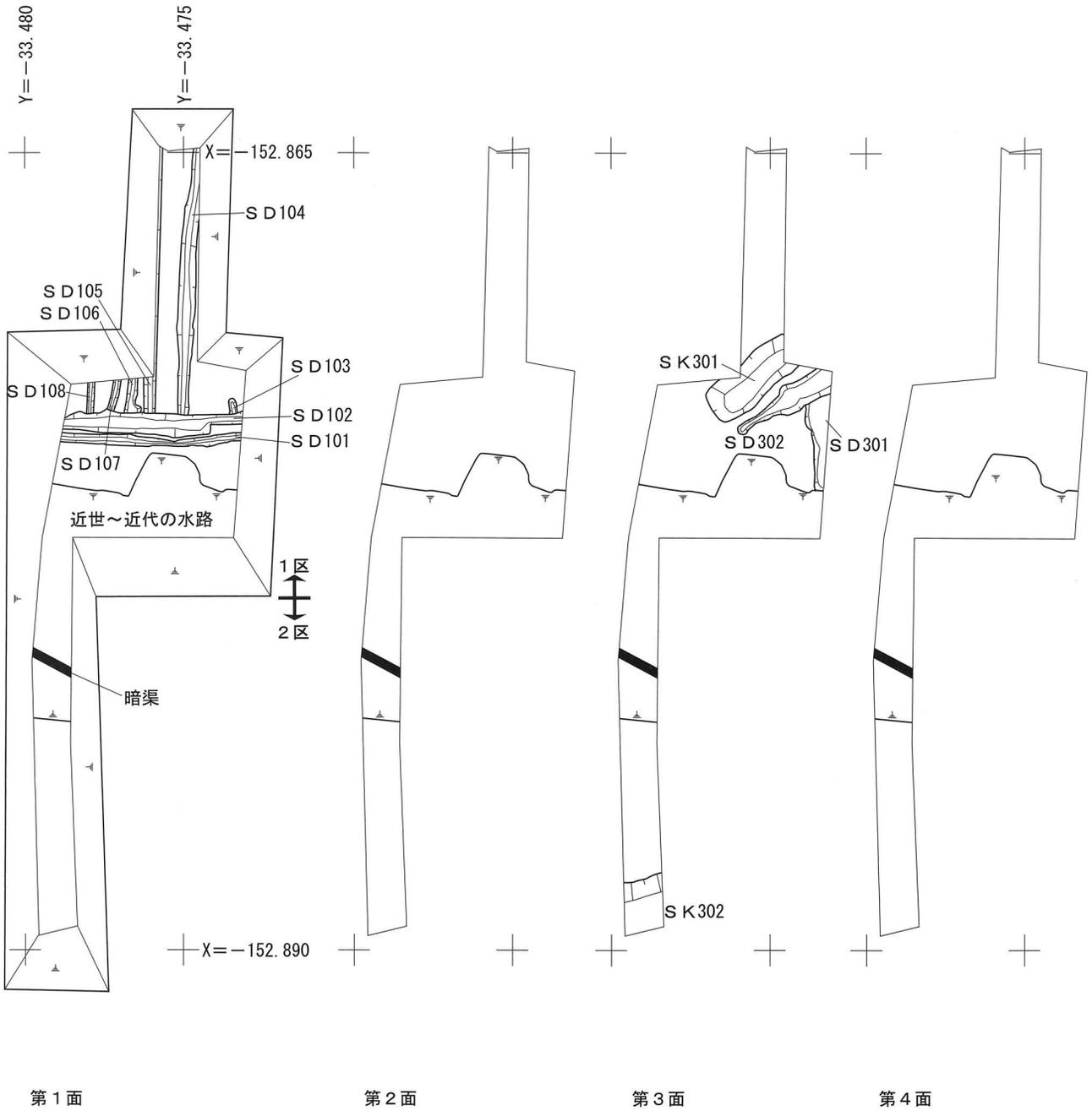


図4 平面図

出土はなかった。なお、SD101は研究会第7次調査の6区で検出したSD158、SD102は同SD159と同一の遺構である。

第2面

遺構の検出はなかった。

第3面

弥生時代後期の土坑2基(SK301・302)、溝2条(SD301~302)を検出した。

SK301

平面形状は隅丸の長方形で、長径3.2m、短径1.2mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.4mを測る。埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

SK302

遺構の南側は調査区外に至るため形状および規模は不明である。検出した南北幅は1.7m以上、深さは0.15~0.2m以上を測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土で、弥生時代後期の遺物が出土した。このうち図化したものは1・2である。1は壺である。突出する上げ底で、体部の内面はユビナデ、外面はヘラミガキ後ユビナデを施す。底部外面はユビナデを施す。2は甕である。突出する平底で、体部の内面はハケナデをクモの巣状に施した後ユビナデを施す。外面は右上がりのタタキ目後ユビナデを施す。底部外面はナデを施す。1・2は生駒西麓産の胎土である。

SD301

遺構の東側は調査区外に至るため形状および規模は不明である。検出した東西幅は0.7m以上、深さは0.1m以上を測る。埋土は7.5YR4/4褐色粗粒砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

SD302

平面形状は南西-北東方向に直線に伸び、幅は0.2~0.9mを測る。断面形状は逆台形で、深さは0.2mを測る。埋土は7.5YR4/6褐色細粒砂混粘土で、弥生時代後期の遺物が出土した。このうち図化したものは3・4である。3は甕の口縁部である。口縁部は「く」の字に屈曲して外反し、端部は面を形成する。口縁部の内面はヨコナデ、外面は左上がりのタタキ目後ヨコナデを施す。端面には凹線文を施す。体部内面はナデ、外面は左上がりのタタキ目のちナデを施す。生駒西麓産の胎土である。4は甕の底部である。突出する平底で、体部の内面はハケナデをクモの巣状に施した後ユビナデを施す。外面は右上がりのタタキ目を施す。底部外面はナデを施す。なお、この遺構は研究会第7次調査の6区で検出したSD240と同一の遺構である。

第4面

遺構の検出はなかった。

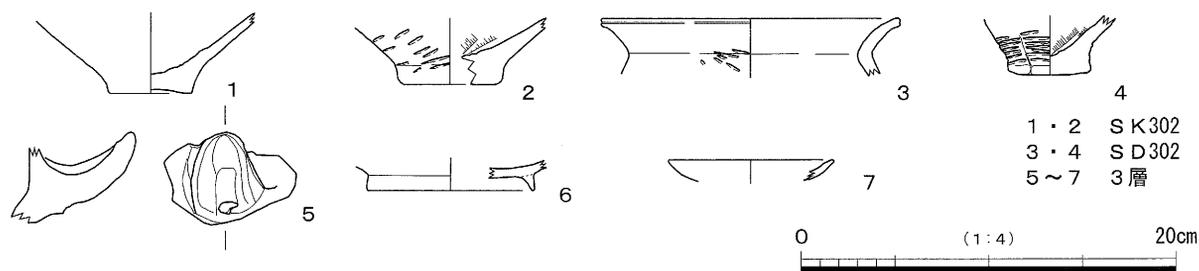


図5 出土遺物実測図

遺構に伴わない出土遺物

3層からは土師器、須恵器、黒色土器などの破片が、4層からは弥生土器、土師器の破片が出土した。このうち図化したものは3層出土の5～7である。5は土師器の鍋の把手部分である。把手は牛角状である。内外面ともにユビナデを施し、外面下部には窪みが1箇所見られる。6は黒色土器の椀で、内面には黒色の炭素が付着している。断面「ハ」の字にひらく高台部が貼り付き、内面はヘラミガキを施すと思われるが、表部が磨耗しており、不明瞭である。外面はユビナデを施す。7は土師器小皿である。口縁部は緩やかに内湾し、端部は尖りぎみに丸く終わる。内外面ともにユビナデを施す。

第3章 まとめ

第1面：調査地北半で検出した溝(SD101～108)は、耕作に伴う溝と思われ、研究会第7次調査と同様、今回の調査地には平安～鎌倉時代の生産域が広がっていることが判明した。

第2面：遺構の検出がなかったため明確な時期は判らないが、おそらく古墳時代中期～後期に相当すると思われる。この時期の遺構は研究会第7次調査地の南部で検出しており、同時期の集落は今回の調査地より南側に広がっている可能性が高いと考える。

第3面：検出し遺構は弥生時代後期に比定でき、研究会第7次調査と同様、今回の調査地には同時期の集落が広がっていることが判明した。

第4面：遺構の検出はなかった。**第4面**のベース層である6層以下では、7層(洪水砂)および8層(土石流)の堆積層を確認した。これらの地層により微高地が形成され、同微高地上に弥生時代後期の集落が営まれたことが判明した。

参考文献

- ・原田昌則 1999「Ⅲ郡川遺跡(第2次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・藤井淳弘 2002「5. 郡川東塚古墳(2000-306)の調査」『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告46
平成13年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・樋口 薫 2006「郡川東塚古墳第1次調査(T2001KOH)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告7』平成17年度 八尾市教育委員会 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 2006「Ⅰ郡川遺跡(第3次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告92』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 2008「6. 郡川遺跡第6次調査(KR2007-6)」『平成19年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 2008「7. 郡川遺跡第7次調査(KR2007-7)」『平成19年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

圖 版



調査前(南西から)



機械掘削状況(北西から)



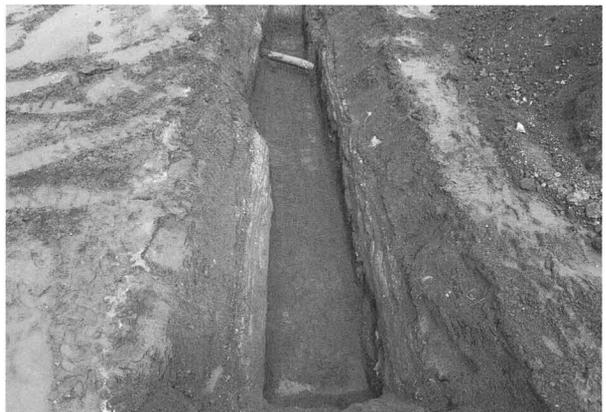
1区人力掘削状況(北から)



1区第3面調査状況(南東から)



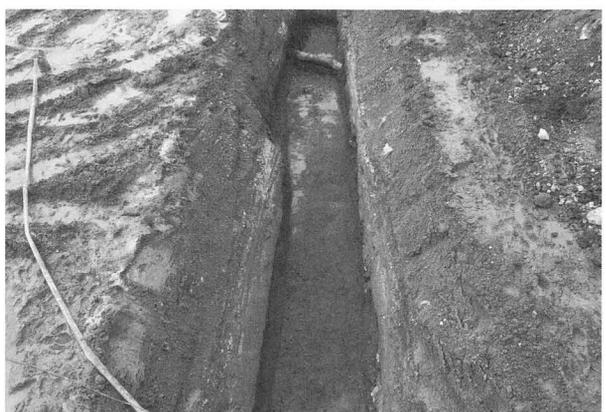
1区第1面(南から)



2区第1面(南から)



1区第2面(南から)



2区第2面(南から)



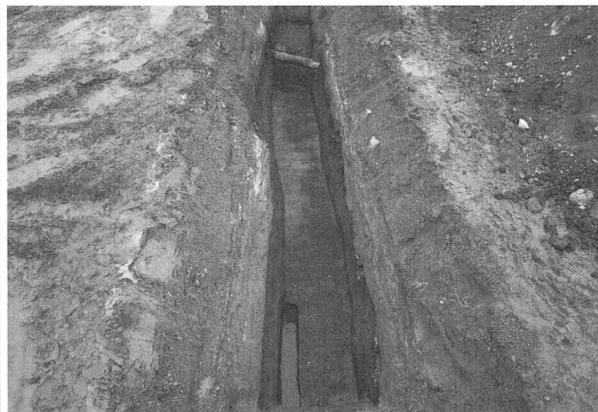
1区第3面(南から)



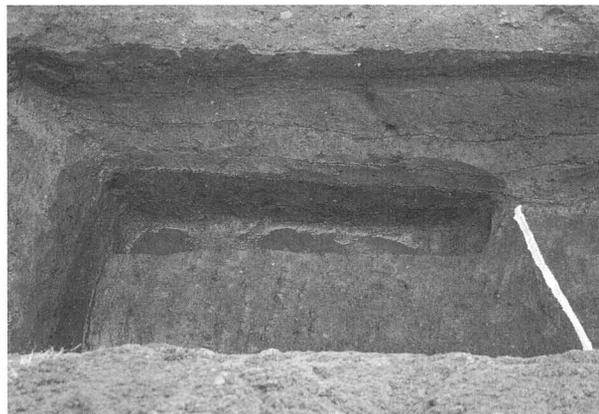
2区第3面(南から)



1区第4面(南から)



2区第4面(南から)



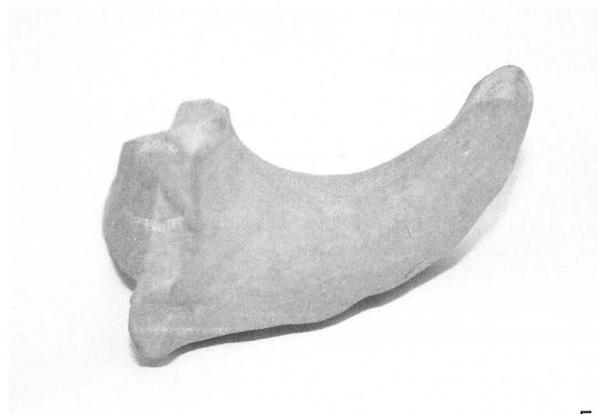
2区SK302(東から)



1



4



5

SK302(1)SD302(4)3層(5)出土遺物

報 告 書 抄 録

| | |
|--------|--|
| ふりがな | ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく123 |
| 書 名 | 財団法人 八尾市文化財調査研究会報告123 |
| 副 書 名 | 郡川遺跡 第8次調査 |
| 巻 次 | |
| シリーズ名 | 財団法人 八尾市文化財調査研究会報告 |
| シリーズ番号 | 123 |
| 編著者名 | 西村公助 |
| 編集機関 | 財団法人 八尾市文化財調査研究会 |
| 所 在 地 | 〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700 |
| 発行年月日 | 西暦2008年12月26日 |

| ふりがな 所 収 遺 跡 | ふりがな 所 在 地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 (㎡) | 調査 原因 |
|-----------------------------|------------------------------|-------|------|---------------|----------------|------------------------|-------------|-----------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| こおりがわいせき 郡川遺跡 (第8次調査) | おおさかふ やおしくろだに 大阪府八尾市黒谷一丁目 | 27212 | 60 | 34度37分 16秒 | 135度38分 06秒 | 20080924 ~ 20081009 | 約122 | 保育所建 設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-----------------|----|---------|---------|------|------|
| 郡川遺跡 (第8次調査) | 集落 | 弥生時代後期 | 土坑 小穴 溝 | 弥生土器 | |
| | | 平安～鎌倉時代 | 溝 | 土師器 | |

| | |
|-----|--|
| 要 約 | 平安～鎌倉時代の耕作に伴う遺構を検出したことにより、当調査地は同時代には生産域が広がっていたことが判明した。また、弥生時代後期には居住域が広がっていたことが判った。 |
|-----|--|

(財)八尾市文化財調査研究会報告123

郡 川 遺 跡

第8次調査

発 行 平成20年12月
編 集 財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印 刷 株式会社 熨斗秀興堂
〒577-0827
東大阪市衣摺5丁目20-10
TEL 06 (6727) 1166
表紙 レザック66 <175kg>
本文 ニューエイジ <70kg>
図版 ニューエイジ <70kg>

郡川遺跡 第8次調査

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告 123

二〇〇八年

財団法人 八尾市文化財調査研究会